



その後、米軍による空襲が激化。マライーニたちは1945年5月に愛知県豊田市の広済寺に移されて終戦を迎えた。東京を経て1946年2月にイタリアに帰国した。

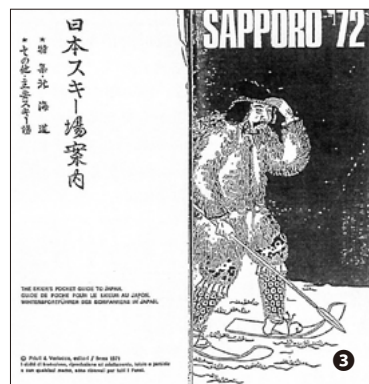
カラコルムでの邂逅

1958年、マライーニは、カラコルムのガツシャブルムIV峰（G4）に初登頂したイタリア登山隊に参加。同時期にカラコルムでは、芳賀孝郎会員も参加した京都大学（ACK）隊がチョゴリザ峰に挑み、初登頂に成功していた。マライーニは、G4登頂者のW・ボナッティらとともにACK隊のベースキャンプを訪問し、互いの登頂成功を祝い合った。

マライーニが著したG4登山隊の記録は日本語訳が『ガツシャブルム4 カラコルムの峻峰登頂記録』（牧野文子訳・理論社）『写真②』として1962年12月に刊行された。マライーニやボナッティらが撮影したカラー写真も豊富に掲載された380ページの大幅で、裏表紙カバーには、マライーニたちがチョゴリザ隊ベースキャンプを訪問した際に芳賀孝郎隊員が撮影した集合写真（写真①）が使われている。

札幌オリンピックを機に

高澤がマライーニに初めて会ったのは1967年3月のこと。坂本直



行の紹介で彼が、高澤の勤務先の丸善札幌支店の事務所に訪ねて来られた。5年後の札幌オリンピックに向けてイタリア語のガイドブックを作る予定だが、参照するアイヌ関連の文献がなくて困っているとのことだった。翌日、私の蔵書を20冊ばかり持参してご覧にいとると大変喜ばれ、全冊を譲り渡した。

このとき逆に私から、丸善で外国人向けのオリンピック土産には何がいいかあれこれ考えているのだが、とアドバイスを求めると、東京国立博物館蔵の富岡鉄斎筆「旧蝦夷屏風」（熊祭や日常生活の風習を描いたもの）はわかりやすいので、そのミニ版はどうだろう、と提案された。

1972年1月上旬、マライーニが札幌オリンピック・イタリア選手団の役員として来札されたので、早速、真駒内の選手村に表敬訪問。彼

の提案に従って京都・便利堂で制作していた富岡鉄斎の屏風二曲一双（机上硯箱脇に飾るミニ複製・英文解説付）を携えて何うと、その出来映えを大変喜んでいただいた。

このときにマライーニからいただいたのは、イタリア語の『日本スキー場案内（特集・北海道）』（写真③）。表紙を北方探検家・間宮林蔵の絵で飾り、アイヌ文化の紹介に多くのページが割かれていた。併せて講談社インターナショナルから出版された英文の『JAPAN』、イタリアの国旗をあしらったネクタイピンや、切手の貼つてある書状も何通もいただいた。

2004年に逝去

日本山岳会には1954年に入会され、1988年には名誉会員に推挙された。

2002年4月から6月にかけて、山岳写真家である水越武会員の尽力もあつて、札幌の北海道立文学館で「フォスコ・マライーニ写真展―東洋への道―」が開催され、私がマライーニからいただいた品々も展示された。しかし、残念ながらその2年後の2004年6月8日、マライーニはイタリア・フィレンツェの病院で91歳の生涯を閉じられた。



北海道で活躍したイタリア人 フォスコ・マライーニ

高澤 光雄

ガツシャブルム
IV 峰

イグルー

北大に留学しアイヌ研究

フォスコ・マライーニは1912年11月15日にイタリアのフィレンツェに生まれた。旅行好きで両親のもと、山登りや写真を好み、本棚には旅行記や冒険談が並んだ。幼い頃に河口慧海著『西藏旅行記』の英訳版を読んで、辺境、少数民族の国に興味を持ち、フィレンツェ大学では人類学を学んだ。

日本の国際学友会外国人研究者奨学金を取得して、1938年に北海道帝国大学に留学。10月31日にイタリアを出発し、12月15日午後7時、猛吹雪の札幌に到着した。

翌日、北大学長と面談し、医学部解剖学教室の児玉作左衛門教授を紹介されたマライーニはアイヌの人類学研究に没頭。大学に通いながら、各地のアイヌコタン（集落）を訪れ、アイヌ民族が祭事に使うイクパスイ（酒べら）を収集、各地の博物館収蔵品を調べ上げ、その研究成果は1942年に東京のイタリア文化会館から出版された。

北大留学中にアイヌコタンを訪れて撮った貴重な写真は、戦後、検書房から出版された『北方文化写真シリーズI 熊祭』（更科源蔵著／1954年4月）、『北方文化写真シリーズII アイヌの踊』（河野広道著

／1956年1月）に提供されている。

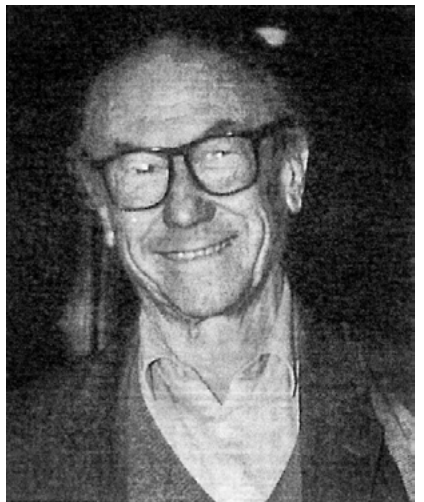
ペテガリ遭難とイグルー

1940年1月5日、ペテガリ岳冬季初登頂を目指していた北大山岳部員9人がコイカクシユサツナイ川第五の滝付近で雪崩に遭い、8人が埋没死した。北大山岳部に所属していたマライーニもこの山行に参加予定であったが、娘の病気で3日遅れて出発。ベースキャンプで声を張り上げて叫んだが、何の応答もなかった。あきらめて下山中に、山岳部先輩の坂本直行と行き会ひ、遭難事件を知った。

札幌に帰ったマライーニは、フランスのマラヴィエイユ夫妻がモンブラン山頂で1週間イグルー（雪小屋）に滞在した、という記事がイタリアの山岳雑誌に載っていたことを思い出し、自宅前でイグルー造りの実験を重ねた。そして同年1月27日、手稲山頂上で、ストック、小型スコップ、鋸を使いイグルーを造って泊まり、その手記と写真が新聞に掲載された。2月16日には芦別岳、3月10日には十勝岳でもイグルーを造っている。マライーニは、イグルーを使用していれば重いテントを背負わずにすみ、

戦時中は敵国人として拘束

1941年にマライーニはイタリア語教師として京都帝国大学に移ったが、第二次世界大戦、太平洋戦争勃発後の1943年9月に、イタリアは連合国に降伏。バドリオ政権がドイツに宣戦布告したため、イタリアは日本にとって、それまでの日独伊三国同盟の同盟国から敵国となってしまった。マライーニ一家5人は敵国人として名古屋・天白の収容所に収容される。監視の警官が食料を横領して収容者にはるくは食事が与えられず、飢餓に苦しむ状況に抗議してマライーニはハンスト。さらに、警官の前で自分の左手の小指を斧で切断して怒った。



ペテガリ遭難は防げたかもしれないと述べている。